

## 年 頭 所 感

## 年 頭 所 感

宮城県医師会会長 佐藤 和 宏



明けましておめでとうございます。昨年は、元旦に能登半島地震、2日に羽田空港で航空機事故があり、大変困難な年明けでした。能登半島地震は地形的な問題なども絡んで、予想を上回る被害があり、JMAT宮城も継続しての支援を行ったことを思い出します。

今年は、そうした自然災害や大きな事故も今のところは無く、平穏なお正月となっています。医療界に目を転じますと、取り巻く状況は相変わらず厳しく「医療を継続していくことが息苦しくなっている」感じが致します。私たち医師は患者さんを診ることが本分であり、その点では何も問題はないはずです。ある医師会の幹部が言った言葉ですが「私たち医師は、政治活動などを行わなくて済めば、それに越したことはないのだが」と言っていました。この方は、医師連盟の活動を本当に熱心に行っていた方なので、その当時は意外な気持ちでしたが、今はよくわかります。

昨年の日医組織内候補を励ます会で言いましたが、当局やその応援勢力は、私たち医師が政治活動に向かわざるを得ないような挑発的な発言を繰り返しています。いわく「今回（令和6年度）の診療報酬改定をマイナス改定にできなかったのは残念だ、道半ばだ」とか「かかりつけ医と言いながら、有事には役に立たなかったのだから、法制度化する」などです。大げさに言えば命がけで発熱外来、ワクチン接種、コロナ患者の受け入れ、クラスターの経験等を行い、日本国民の節度ある行動にも助けられて、わが国はG7国中、最低の死亡率だったはずです。マスコミもそうした点は評価せず、医師や医師会に対しては途中からは批判ばかりだったように記憶しています。なかなか終息せず何回も（第11波まで）襲って来ることや、次々と変異株が現れ死亡者も増えるという恐怖の連続の中では、仕方のなかったことかもしれません。

しかしながら「コロナで儲かったのだから、診療報酬はマイナス改定だ」という当局の考え方は、私たち医師の心を折りました。確かに、外来も入院も、コロナに関しては過剰な点数設定だな、と感じる点数もありました。しかし、それは私たちが要求したものではなく、厚労省がつけた点数でした。またコロナワクチンや特効薬の過剰備蓄と廃棄のために、約1兆円が無駄に使用されたという報道にも接しましたが、厚労省の役人が責任を取らされたという話は聞いておりません。当時は、過剰な点数設定も過剰な備蓄も、仕方なかったのだと思います。それを後出しじゃんけんのよう、医療側だけに診療報酬をマイナス改定にすると言われても全く困りますし、怒りさえ感じます。

こうした私たち医師の怒りを合法的に示す方法は、やはり政治の世界しかありません。日本医師会の批判や仲間内でいがみ合っても、何の解決にもなりません。むしろ敵対勢力を喜ばせるだけです。医師連盟の活動を一生懸命に行っても、どれだけ効果はありますか、と問われると即答はできません。ただし、今まで示したことがない大きな力で、組織内候補を政治の世界に送り込めたら、情勢は変わると思います。

以上、年頭所感としては、若干ふさわしくない内容だったかもしれませんが、今回こそ私たち医師の底力を満天下に示す時ではないでしょうか。そして、平穏な気持ちで患者さんと対面したいと願っております。先生方のご健勝、ご活躍を祈念致しまして、年頭のご挨拶とさせていただきます。今年もよろしく願い申しあげます。